

高校生の進路形成に与える高大連携事業の教育効果

山田, 裕司
九州大学大学院博士後期課程2年

<https://doi.org/10.15017/3686>

出版情報：飛梅論集. 5, pp.135-149, 2005-03-18. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

高校生の進路形成に与える高大連携事業の教育効果

山 田 裕 司*

1. 課題の設定

本研究の目的は、第一に、高大連携事業を実施している大学側は高校生の進路形成（進路選択）における進学アスピレーションを高める機能を果たしているのか、第二に、公開授業を行なっている大学側は高校生が希望する教育を提供しているのか、第三に、高大連携事業は誰にとって進路学習としての教育効果を果たしているのか、という三点を明らかにしていくことである。高大連携事業において教育資源や、人的資源、教育の機会を提供している大学側の立場から、高校生の進路学習または進路形成に及ぼす教育効果を考察することは、高大連携事業において高校生を送り出す高等学校側、高校生を受け入れる大学側の方針に対して示唆を与えうると考える。本研究では、九州大学人間環境学研究院が平成13年度から取り組んでいる「九大人間環境学研究院いつでもオープンキャンパス」（以下九大OC）の事例を取り上げる。

高等学校と大学は、1990年代後半から、高校教育と大学教育の教育内容における接続を目的とした高大連携事業を行なうようになった¹⁾。従来の高校教育と大学教育の教育目的・教育内容は、小学校から中学校、中学校から高等学校という学習指導要領による制度的な連続性が定義されていなかった（池田2003）。高校生の約4割が大学へ進学するようになった1999年、中教審は「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（答申）において、大学教育は「高等教育を受けるのに十分な能力と意欲を有する高等学校の生徒が大学レベルの教育を履修する機会」の提供すること、を提言した。

中教審答申（1999）は、生徒・学生の長期的なキャリアに注目して、初等中等教育や高等教育におけるキャリア教育の位置づけや、初等中等教育から高等教育における連続的なキャリア教育の方針を示した。各教育段階のキャリア教育に一貫した方針は、(1)「自ら学び、自ら考える力」と「課題探求能力」の育成を軸にした教育、(2) 生徒、学生の主体的な進路選択のために充実した進路指導・学習指導をすること、の2点であった。文部科学省（2003）は、高等学校外における大学教育の教育資源の活用状況（「大学の科目等履修生、聴講生又は公開講座などの制度の活用状況」）、高等学校内における大学教育の教育資源の活用状況（「大学教員による高等学校での学校紹介や講義等の実施状況」）という視点からまとめられた。2000年度から2003年度の高大連携事業は、高等

*九州大学大学院博士後期課程2年

学校外における連携事業が平成12年の68校から平成15年の528校、高等学校内における連携事業が平成12年の49校から平成15年の257校、と量的に増加してきた。高校教育と大学教育の質的な連携に着目した荒井（2003）は、近年の高大連携事業が大学教育の教育プログラムをとおして、従来の大学入試による「選抜接続」に変わる方策として、「教育接続」となっていることを示した²⁾。

高等学校の進路学習、高校生のキャリア形成という視点から、高大連携事業は全国的に展開してきたのである。荒井（2003）、勝野（2003）らの先行研究からも分かるように、高大連携事業は、高等学校における教育効果を調査研究したものが主であり、教育資源・人的資源を提供する大学側からの視点が欠けている。したがって、本研究では、高大連携事業をとおして、大学教育は高校生の進路選択やキャリア形成にどのような教育効果を及ぼしているのか、事例を取り上げて明らかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。第2章では、九州大学人間環境学研究院が平成15年度に県内11校と行なった取り組みの目的と、他の高大連携事業とは異なる特色を示す。第3章は仮説を示し、第4章では、九大OC参加者と不参加者の高校生を対象とした質問紙を分析して、第3章の仮説を検証する。最後の第5章では、九大OCの取り組みを踏まえて、高校生のキャリア形成、進路設計における大学側の取り組みと、高等学校の進路学習における高大連携事業の位置づけに関する展望を論及する。

2. 高等学校と大学の連携事業—九州大学人間環境学研究院の取り組み—

(1) 九大OCの概要

九大OCは平成13年度の前期・後期、平成15年度後期、平成16年度後期の計4回の実績がある³⁾。事業を行なうにあたり、事務局を大学（教育学部門地域連携ワーキング・グループ）と、福岡県教育委員会高校教育課に設置した⁴⁾。県教委は、高等学校との連絡や参加人数の調整、大学事務局との連絡等を担当した。

平成15年度後期から、九州大学教育学部を中心としたワーキング・グループは「九州大学人間環境学研究院いつでもオープンキャンパス」という名称のもと、「県立高等学校生徒の学習意欲の向上、県立高等学校のガイダンス機能の充実を支援すること」を目的とした事業を開始した⁵⁾。高校生は「九州大学が公開する授業を任意に選択」し、「オブザーバー」として、平成15年11月4日から平成15年12月末まで参加した。

(2) 特色ある九大OC事業

高校生が大学教育を受講する取り組みは、大学における聴講を高等学校がどのように評価しているかで2つに分類することができる。一つは、大学における聴講を高等学校の単位として単位認定している取り組みである。単位制の全日制・普通科高校である神奈川県立神奈川総合高等学校は、神奈川大学や洗足学園大学、横浜国立大学等における聴講を「学校外活動」と位置づけて、上限10単位までを単位認定している。平成9年度から高大連携事業に取り組んでいる神奈川総合高等学校

は、高大連携の「先進校」と呼ばれていたが、近年では、連携先が特定の学部（神奈川大学では中国語概説や中国政治経済概説）に限定されている、受講者数が頭打ちになってきたという問題を抱えている（勝野2003, 12月号）。

もう一つは、単位認定をしない取り組みである。夏期休業中や週末等を利用して、高校生の学力に合わせた公開授業を行なう大学は増加してきたが、九大OCのように「平日」の大学生を対象とした講義・演習を高校生に公開する形態の取り組みは、全国的にみても特色ある高大連携事業として位置づけることができる。

3. 分析の方法

(1) 分析の対象

九大OCに参加した県立高等学校は11校、参加高校生は143名である。しかし、参加後に行なった質問紙調査（「高校生の進路設計とキャリア」）に回答協力した高等学校は、9校のみであった⁶⁾。調査の目的は、(a) 九大OCに参加した高校生の視点から取り組みの事後評価を行なうことによって、九大OCにおける高校生の目的と大学側の意図の「ミスマッチ」を防ぐこと、(b) 九大OCに参加しなかった高校生の理由の把握、(c) 九大OCに参加した高校生と参加しなかった高校生の進路学習としての九大OCの位置づけ、を明確にすることである。

(2) 仮説

質問紙の分析は、高校生の卒業後の進路設計に関する質問、九大OCの教育内容に関する質問、進路学習としての九大OCの教育効果に関する質問の3項目を中心に行なった。以下では、高大連携事業としての九大OCが、高校生の進路形成に与える教育効果を検証する三つの視点を示す。

第一の仮説は、九大OCは、高校生が進路選択をするうえで必要とする情報を提供して、高校生の進学アスピレーションを高める機能を果たしている、ということである。これは、高大連携事業としての九大OCが高校生の進路学習の一つとして教育効果を及ぼしているといえることができよう。

高校生は卒業後の進路を選択するために、高等学校の進路学習、高等学校の教師への相談、学習塾の利用、先輩や家族への相談等から情報を得て、進路形成を行なっている。利用する情報源・情報は個人によって異なるが、概して言えることは、これらは他人の経験に基づくものということである。近年、高大連携事業の一環として、高校生は大学を訪問すること、大学の授業を聴講することが可能となり、進路選択するうえで必要とする情報を自分から獲得できるようになってきた。このような視点から、九大OCに参加することは、高校生が高等学校卒業後の進路形成をするうえで有効な手段であると考えられることができる。

九大OCが高校生の卒業後の進路形成に与える教育効果を分析するにあたって、進路設計における「進路学習の参考度」と、卒業後の進路に対する「重視度と認知度」の質問項目を分析した。前者は、高校生が利用可能な進路学習の方法を9項目抽出して、「あなたの進路学習において、次のこ

とはどの程度参考になりましたか」(複数回答)という質問を行なった。各項目の参考度は、「とても参考になった」から「まったく参考にならなかった」の4段階に設定した。後者は、高校生が進路形成するうえで進学先の情報をどの程度獲得しているのかを測定するために、「あなたは進学希望先について、次の項目をどれくらい重視しますか」(重視度)、「あなたは進学希望先について、次の項目をどれくらい知っていますか」(認知度)という質問を行なった。

第二の仮説は、九大OCは、高等学校や高校生の高大連携事業に参加する目的を踏まえた取り組みを行なっているため、大学と高校生の間には「ミスマッチ」が生じていない、ということである。

九大OCの実施形態は、実施期間が平日の4ヶ月限定となっている。したがって、参加方法に対する希望には、どうしても個人差が生じてしまう。このような実施形態の問題は、九大OCを含めた高大連携事業が抱える問題点でもある(勝野2003, 12月号)。本稿では、実施期間や参加回数という形態に対する高校生の希望も質問に加えて、大学側が提供する教育形態「授業内容」に対する高校生の希望に注目した。どのような教育内容が、高校生の進路形成におけるガイダンス機能を果たすことができるのだろうか。高校生の学力レベルに見合った教育内容を提供することであるのか、それとも実際の大学教育を提供することなのか。高校生が大学教育に参加するという行為が進路学習としての教育効果を高める機能を果たすためにも、高校生の目的や希望にマッチした教育内容を提供することが、今後の高大連携事業としての九大OCに求められているであろう。

第三の仮説は、九大OCに参加することは、卒業後の進路設計を「九州大学」または「九州大学教育学部、文学部」としている高校生に対して教育効果を及ぼすが、「九州大学以外の大学」や「九州大学教育学部、文学部以外」の学部希望者に対しては教育効果を及ぼしていない、ということである。

平成15年度後期の九大OCは、教育学部の授業・講義を中心に、文学部・工学部、教養課程の一部の科目を開講した。卒業後の進路設計を「九州大学」、「九州大学教育学部、文学部、工学部」と設定している高校生にとっては、九州大学の教育や大学の雰囲気を経験する機会として受け入れられるであろう。しかし、九州大学以外の大学を希望している高校生にとって、九大OCはどのように評価されているのか明らかにされていない。例えば、九大OCを高校生は、夏期休業を利用して各大学・短期大学・専修学校が実施している「オープンキャンパス」のように理解しているかもしれない⁷⁾。大学側と県教育委員会、高等学校の教師間において九大OCの目的は合意されているが、それが高校生レベルまでは伝わっていない可能性があるのではないだろうか。これらを解明するためにも、まずは、高校生が高大連携事業や九大OCをどのように捉えているのか分析する。そして、九大OCの参加高校生を対象として、進学希望先別に進路学習としての九大OCの教育効果を測定していくことにする。

4. 高校生の進路設計と九大OC

(1) 高校生は九大OCをどのように捉えているのか

本節では、九大OC参加者と高校生の進路設計を示して、参加者はなぜ九大OCに参加したのか、そして参加しなかった高校生はなぜ九大OCに参加しなかったのか明らかにする。

1.1. 九大OC参加者の進路設計

九大OC参加かつ質問紙調査に協力が得られた高校生は、計143名であった。参加者の95.8%は卒業後の希望進路が進学であり、そのなかでも97.1%が進学先を大学としていた。この結果から、九大OC参加高校生は、卒業後の進路設計が決まっていた。

では、高等学校卒業後の希望進路が大学進学としている高校生は、九大OC参加という行為にどのような目的、希望を抱いているのだろうか。まずは、参加する時に重視した点を分析した(N=140)。その結果、「志望大学なので雰囲気・研究内容を知りたかったから」(36.4%)、「志望大学は九大以外、または未定だが、大学の雰囲気を知りたかったから」(27.9%)、「進路を決定する上で参考にしたかったから」(19.3%)という項目の回答数が多かった。高校生は、他者からの卒業後の進路に関する情報以外に、積極的に自分から大学に関する情報を収集するという行為をとっているのである。また消極的な意図で参加する高校生は少なかった(「友達に参加していたから」[0.7%]、「高校の先生の勧めがあったから」[3.6%])。九大OC参加者の約9割が高校2年生であることを考えると、九大OC参加者は早い段階から卒業後の進路設計をしていることが明らかになった。

第二に、参加者が大学側に希望する点を教育内容という点から分析した(N=140)。この結果からも、九大OC参加者は、卒業後の希望進路と直接関連しているから(「志望する学部の専門分野だった」[47.9%])、または間接的に関連しているから(「志望する学部・専門分野とは異なるが九大の授業を受けたかった」[24.3%])というように、進路設計における情報収集を積極的に行っていることが示された。

1.2. 高校生の進路設計

九大OC不参加の高校生は、参加した高校生と卒業後の進路設計が異なるから、九大OCに参加しなかったのだろうか。それとも、九大OCは「九州大学」進学希望者のための取り組みであるために、または九州大学を含めた進路希望先としての大学に関する情報を獲得しているから参加しなかったのだろうか。

不参加者の卒業後の希望進路を分析した結果、参加者と同様に90.2%以上の高校生が進学を希望しており、そのなかでも97.7%が大学を進学希望先としていた。では、九大OC参加者と不参加者では何が異なるのであろうか。以下では、「あなたが参加しなかった理由は何ですか」という質問項目を中心に分析を行なった。

その結果、不参加者の47.4%が「行く必要がないから」(N=345)と捉えていることが明らかになった。また、九大OCは平日開講であるため、高等学校の授業との関係で参加することが困難であるという高校生もいた(「日程や時間の都合が合わなかったから」22.5%)。さらには、九大OCを進学希望先としていない高校生は、九州大学の雰囲気や授業の情報ではなく、卒業後に進学希望する大学・学部の情報を体験することを望んでいることが明らかになった(「希望する学部がなかったから」13.7%)。このような高校生は、九大OCに対して、長期休業中等を利用して行なわれている「オープンキャンパス」と同様の感覚を抱いているのであろう。以上の回答は、高校生が九大OCの存在を知っているという前提のもとに、高校生の卒業後の進路と九大OCの関係から不参加という選択肢を選んだ理由を分析してきた。しかし、「九大人間環境学研究院いつでもオープンキャンパスを知らなかったから」(25.3%)参加しなかった高校生がいるということも、今回の質問紙調査から明らかになった。以上から、九大OCの目的である「高校生の進路学習としてのガイダンス機能を果たすこと」は、その目的や意図が高校生に伝わっていなかったことが示された。

(2) 高校生は進路学習から何を獲得しているのか

2.1. 進路設計における情報の獲得手段

高校生は進路設計をするうえで、九大OCのように高等学校外部で実施されている高等教育機関が主体となつて行なう活動(公開講座、「オープンキャンパス」等)、高等学校内部で行なわれる進路指導(進路学習、三者面談等)を利用する。本稿では両者を進路設計における進路学習として捉えて、これらに対する高校生の行為や期待を分析していくことにする。

まずは、高校生が進路設計を行なうために、どのような進路学習を利用しているのか、九大OC参加者と不参加者の比較をもとに分析する。分析の結果、参加者は、不参加者に比べて多様な進路学習を利用していることが明らかになった。両者の差が顕著であった項目は、外部から情報を得る手段の活用度であった(「その他学外で開催されたオープンキャンパス」[参加者39.9%, 不参加者26.8%]、「進路選択に関する説明会やガイダンス」[参加者75.5%, 不参加者54.5%]、「学校行事としての見学・研修の機会」[参加者68.5%, 不参加者48.4%])。また、不参加者は、参加者に比べて「進路指導室の資料の利用」、「進路指導担当や担任の先生との進路の相談」という高等学校内部の進路学習を利用する割合が高かった。以上から、参加者と不参加者では、卒業後の進路に関する情報を獲得する手段が異なっていた。

2.2. 進路設計で重視する情報

参加者と不参加者の進路学習の活用度を踏まえて、以下では、両者が必要としている情報、獲得した情報の差異性と、それに対する今後の九大OCの取り組みを考察する。

質問「あなたは進学希望先について、次の項目をどれくらい重視しますか」⁹⁾から、参加者と不参加者の進路設計において必要とする情報の重視度の差異性を分析した。その結果、「学部・学科・分野」、「自分の学力・適性」、「学校の雰囲気」の3項目では、両者が共通の傾向を示していた。

高校生の進路形成に与える高大連携事業の教育効果

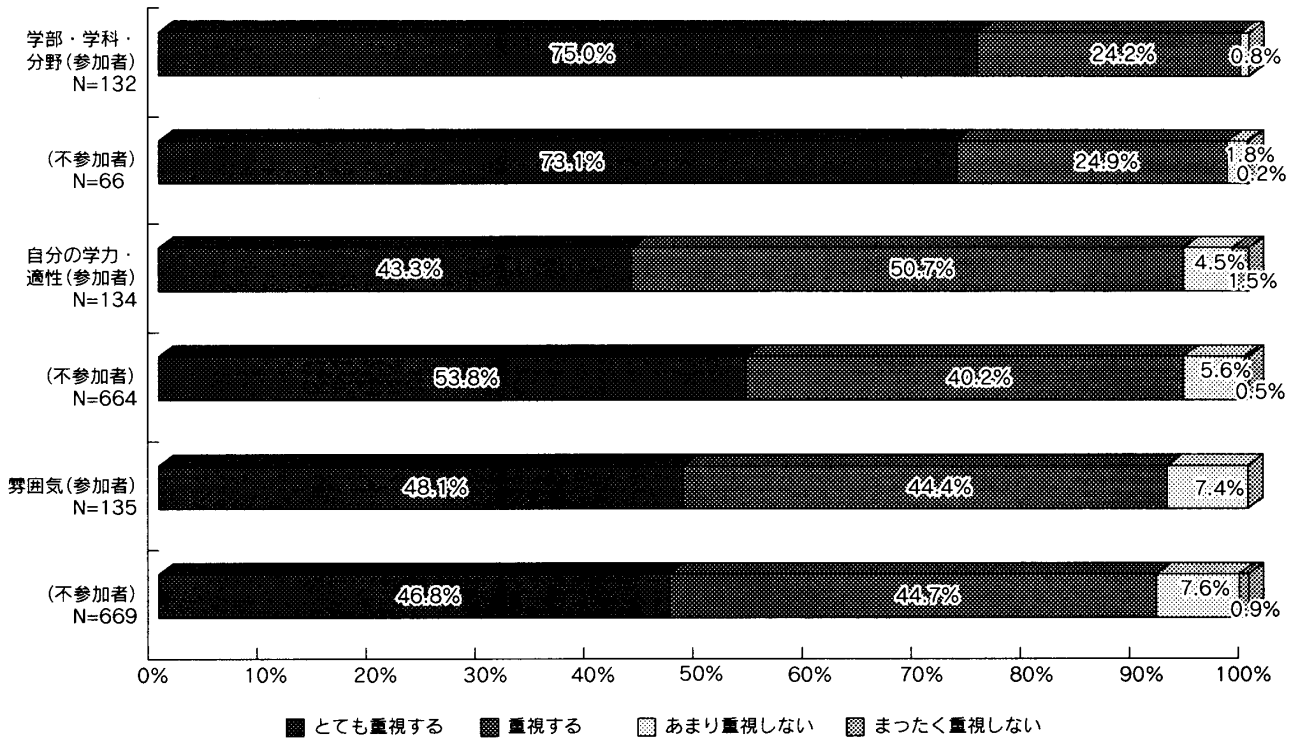


図1 高校生が進路選択で重視する項目（上位3項目）

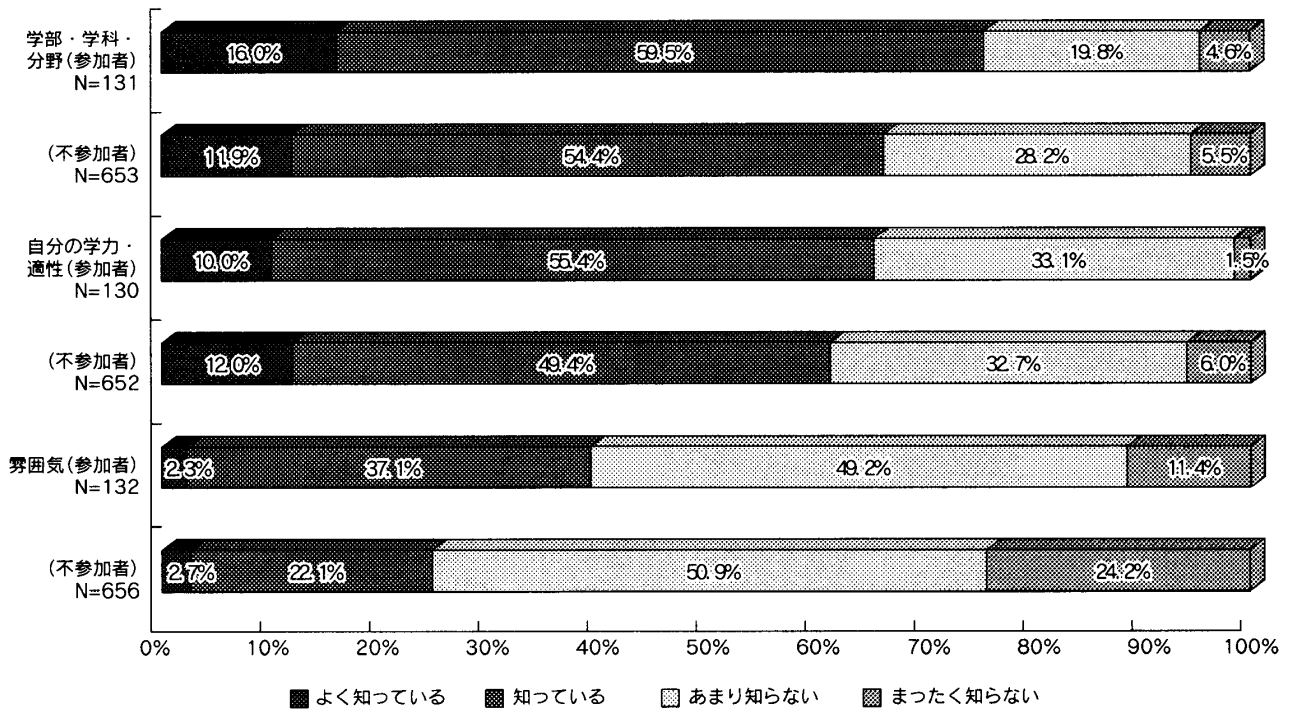


図2 高校生の進路希望先に対する認知度

また、この3項目は、参加者が「とても重視する」と「重視する」の合計の回答率が上位項目である⁹⁾。

図1から、90%以上の高校生が進学希望先の「学校の雰囲気」の情報を重視しているが、質問紙回答者の83.6% (N=871) が九大OCに参加していないことがわかる。不参加の高校生は、九大OCを「オープンキャンパス」と同種の取り組みとして理解しているのである。今後の九大OCは、「オープンキャンパス」とは異なる目的があることを高校生に伝達して、高校生の進路学習のひとつの手段となるようにしていく必要があるだろう。

さらに、獲得した情報を参加者と不参加者の比較をとおして分析した¹⁰⁾。図1の3項目の認知度は、「学校の雰囲気」が他の2項目に比べて、「よく知っている」と「知っている」の割合が低かった(参加者39.4%, 不参加者24.8%)。参加者と不参加者の比較では、九大OCに参加するという行為が、「学校の雰囲気」に関する情報を獲得する手段となることが示されている。今後の九大OCは、大学という高校生にとって知らない世界の「雰囲気」を知る手段として事業を展開することが必要となるであろう。それによって、高校生は進路学習として九大OCや高大連携事業を進路学習として利用するようになるであろう。

(3) 高校生の希望する九大OCの形態

高校生が進路学習として高大連携事業をとらえるようになるには、今後どのような取り組みを行なうことが望ましいのだろうか。本節では、現行の九大OCと比較して、高校生が希望する九大OCの形態を「対象学年」、「参加希望時期」、「参加回数」、「授業内容」という4つの視点から分析していくことにする。

3.1. 対象学年

高校生は九大OCの対象学年は、「学年に関係なく参加できるほうがよい」(参加者40.5%, 不参加者48.3%)、「高校2年次が望ましい」(参加者51.1%, 不参加者39.2%)を希望していた(参加者N=131、不参加者N=714)。この結果と、九大OC参加高校生の約9割が高校2年生であることから、九大OCは「高校2年生」段階の進路学習として機能していることが読み取れる。

3.2. 参加希望時期

平成15年度の九大OCは、11月から12月の2ヶ月の平日の授業・演習を高校生に公開した。大学の「平日の授業時間」を高校生に開放するという形態に対して、高校生は好意的に捉えていた(参加者66.2%; N=130, 不参加者48.1%; N=711)。しかし、参加希望時期に関しては、参加者が「平日の授業時間」に参加することを望んでいるに対して、不参加者が「平日の授業時間」、「長期休業中」(不参加者34.0%, 参加者17.7%)に参加することを望んでいるという違いがみられた。また、高等学校の授業との関係から、「日程の都合が合わず」参加できなかった高校生が22.5%いることも明らかになった。このような結果を踏まえて、九大OCは1年間の2ヶ月間という期間だけ設定す

るのではなく、短期間でも数回に分けて実施するといった取り組みの実施方法を検討していく必要があるだろう。

3.3. 参加回数

九大OCは参加回数を制限しなかった。また、「人間開発論」（教育学部）のように2週間連続して参加することを必須条件としている教科もあった。これらを踏まえて、高校生は九大OCの参加回数は、「参加可能なときだけ参加するのが望ましい」（参加者42.7%、不参加者45.0%）、「複数回参加できる授業が望ましい」（参加者28.2%、不参加者29.8%）、「一回だけの参加でもよい」（参加者22.1%、不参加者19.4%）というように、現行の取り組みに納得しているようであった（参加者N=131、不参加者N=707）。一方で、「大学生と同じ回数だけ参加できるのが望ましい」（参加者6.1%、不参加者5.2%）という回答が少ないことから、高校生は大学教育の内容を理解したいのではなく、大学教育や大学生生活の雰囲気を高等学校在学中に体験することを目的としていることが示された。

3.4. 授業内容

では、大学生を対象とした「専門的な授業内容」を中心とした大学教育を公開した九大OCの取り組みに対して、高校生は、どのように感じているのだろうか。調査分析の結果、高校生が希望する九大OCの授業内容は、「高校生にも理解できる入門的な授業」（参加者59.5%、不参加者52.9%）であった。「専門的なレベルの高い授業」を希望する高校生は、参加者の21.4%、不参加者の12.4%と低い回答率であった。一方で、不参加者が希望する授業内容は、講義・演習といった授業形態ではなく、「実験・実習のできる授業」（参加者12.2%、不参加者26.5%）であることも示された。

(4) 進路希望先別にみる九大OCの教育効果

卒業後の進路設計をしている高校生は、九大OCに対して、何を求めているのだろうか。本節では、卒業後の希望進路が九州大学であるか、または九州大学以外の大学であるのかに分類して、九大OCが誰にとって進路学習としての教育効果を及ぼしているのか考察する。

4.1. 進路学習としての高大連携事業

高校生は、九大OCや高大連携事業を進路学習の一つとして位置づけているのだろうか。まずは、参加者を対象とした「あなたは、来年度以降（九大OCへの）参加を希望しますか」という質問結果をまとめた。参加した高校生の61.0%は、来年度も「ぜひ参加したい」、「機会があれば参加したい」という評価をしていた。また、平成15年度の教育学部・文学部・工学部以外の授業にも参加を希望している高校生が14.0%いることも明らかになった。一方で、「他の大学の授業に参加したい」高校生が20.0%いることも示された。以上の分析から、高校生は、高大連携事業を進路学習として次年度以降も活用したいと考えていた。

表1と表2は、高校生の九大OCや「オープンキャンパス」への参加経験別にみた参考度を分析した結果である。表1は九大OC参加者のみ、表2は参加者と不参加者を対象にしている。表1と表2の比較から、高校生を対象とした公開授業や大学説明会をしている「オープンキャンパス」と同様、九大OCも進路学習として有用であることが示された。

表1 九大OCオープンキャンパス（参加者のみ）

	とても参考になった	参考になった	参考にならなかった	まったく参考にならなかった	合計
今回が初めて	20.5	60.2	13.3	6.0	83
以前あり	27.0	56.8	13.5	2.7	37

単位：％

表2 他のオープンキャンパス（以前にも経験あり）

	とても参考になった	参考になった	参考にならなかった	まったく参考にならなかった	合計
参加者	9.1	36.4	33.3	21.2	33
不参加者	16.6	26.9	33.8	22.8	145

単位：％

4.2. 進路希望別にみる九大OCの評価

高校生の90.0%以上が卒業後の進路設計を大学進学としていた。参加者の67.6%、不参加者の49.9%が進学希望先を九州大学としていた。九大OCには進路希望先を九州大学としている高校生が多数参加していた。では、不参加者の九州大学進学希望者は、なぜ参加しなかったのだろうか。それは、九大OCが進路学習として有用ではないと捉えているから、参加しなかったのではないだろうか。

九州大学を進学希望先としている高校生の84.8%、九州大学が進学希望先ではない高校生の69.8%は、九大OCに参加したことは進路学習として「とても参考になった」、「やや参考になった」としている（図3）。高校生の九大OCへの評価から、九大OCは九州大学を進学希望先にしていない高校生にとっても、進路学習として教育効果を及ぼしていることが読み取れる。参加しなかった高校生は九大OCを他の「オープンキャンパス」と同様に位置づけていた可能性がある。高校生の進学ガイダンス機能として九大OCが発展していくためにも、高校生に対して九大OCの目的を明確にすることが求められるであろう。

高校生の進路形成に与える高大連携事業の教育効果

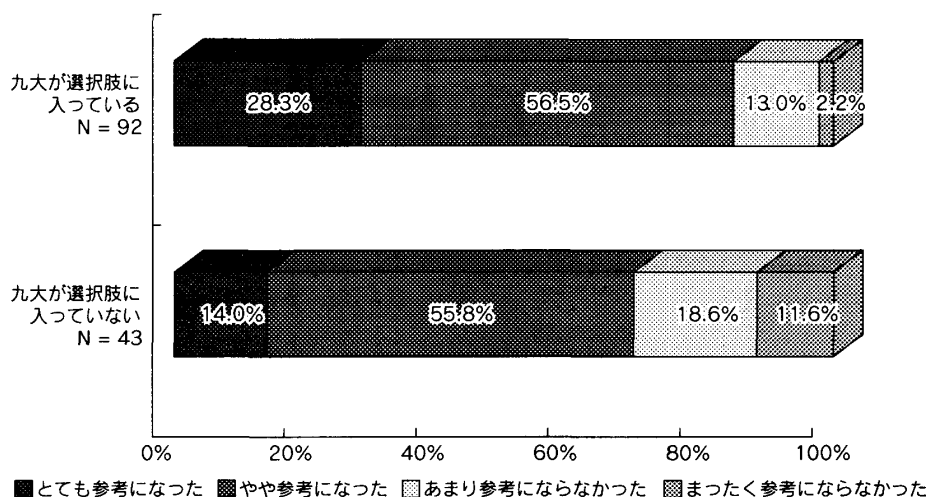


図3 進学希望者別の九大OCの効果（九大OC参加者）

5. まとめと今後の課題

(1) まとめ

本稿は、高大連携事業としての九大OCが進路学習として高校生に位置づけられているのか、さらには九大OCが進路学習のガイダンス機能として教育効果を及ぼしているのか、という2つの視点から質問紙調査を行なった。

第一の知見は、参加者と不参加者は、進路設計を行なうための情報の獲得方法と、必要とする情報に違いがみられたことである。九大OCの参加者は、高等学校外部の大学・短期大学・専修学校が主催する公開講座や「オープンキャンパス」を進路設計における情報源として利用しているのに対して、不参加者は高等学校内部で行なわれる進路指導や三者面談といった進路学習を利用する比率が高いことが明らかになった。また、希望進学先における情報の重視度と認知度の比較からは、参加者と不参加者とも、「学校の雰囲気」を重視しているにもかかわらず、不参加者はその情報を入手する進路学習（例えば、九大OCや「オープンキャンパス」等）を活用していないことが明らかになった。

第二の知見は、平成15年度後期に実施した九大OCの取り組みは、高校生の高大連携事業に対する希望を反映していない側面が明らかになったことである。九大OCの取り組みに対して参加者は、「対象学年」と「参加希望時期」、「参加回数」は現在の形態を評価していた。しかし、不参加者には、参加する時期が平日ではなくて、「長期休業中」を希望する意見がみられた。さらに、参加者と不参加者とも授業内容は、大学生を対象とした「専門的なレベルの授業」ではなくて、高校生にも理解できるような「入門的な内容」や、講義・演習という授業形態ではなくて「実験・実習」が行える授業への参加を希望していることが明らかになった。

第三の知見は、九大OCへの参加は、卒業後の進路希望大学が九州大学であるか否かに関係なく、

進路設計におけるガイダンス機能を果たしていることが明らかになったことである。九大OCは九州大学進学希望者を対象とした取り組みではないことから、このような結果は、九大OCが「進学意欲を培うための進路学習となること」という目的を果たしていると捉えることができよう。

(2) 今後の課題

高校生の進路学習として、九大OCが発展していくためには、高校生の希望を反映した取り組みを行なっていく必要があるだろう。以下では、質問紙調査の結果を踏まえて、今後の九大OCの改善点と展望を論及する。

第一の視点は、九大OCの目的や取り組みを高校生に伝達するシステムを形成することである。調査結果から、大学進学希望者が90.0%以上であり、そのなかでも九州大学を希望している高校生が52.2% (N=793) いることが示された。しかし、九大OCに参加した高校生は、全体の21.0%の136名であった。九州大学を進学希望先としているにもかかわらず、九大OCに参加しなかった高校生が322名もいるのである。

九大OCは高校生の進路学習としてのガイダンス機能を果たすことを目的に掲げているが、高校生にとっては夏期休業中の「オープンキャンパス」同様の取り組みとして捉えられている。平日の大学生を対象とした授業に参加することは、即時的な結果をもたらすかどうか、高校生にとっては懐疑的であろう。けれども、図3の結果は、九州大学が進学希望先ではない高校生にとっても、九大OCが進路学習として参考になることを示している。現行の九大OCは、他の高大連携事業や「オープンキャンパス」とは異なる機能を備え、進路形成における教育効果を及ぼすことを高校生に伝達するルートが確立していない。伝達システムの形成は、九大OCの早急の課題であろう。このことは、九州大学の教育・人的資源を利用した地域連携全体に共通した課題でもある。

第二の視点は、高校生の希望や高等学校の教師の期待を反映した九大OCの取り組みを展開することである。九大OCは平成13年度から始まった連携事業であり、まだ取り組みに対して試行錯誤している段階である。今回の高校生への質問紙調査の結果は、九大OCの現行の取り組みに対する肯定的な評価が示された一方で、授業内容の「ミスマッチ」を明らかにした。これらは、大学側の改善だけでは解決することはできない課題である。高等学校と大学、県教育委員会の三者間における「高大連携協議会」等の活用や、高校生への意識調査等の結果を踏まえて「ミスマッチ」の解消に取り組むことが、今後の九大OCの発展につながると考える。

〈注〉

—第1章—

(1) 勝野は『月刊高等教育』において、高等学校（高校教育）からの視点で、高大連携事業の目的や、各県における取り組みを12ヶ月にわたって報告している。報告は『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望』（学事出版、2004）にまとめられている。

- (2) 中教審答申(1991)以降の高等学校の多様化、進学率の上昇にともなう大学進学者の平均学力の低下という現状を踏まえて、高校と大学の接続には、「人間形成に重きをおいた多様な接続が必要ではないか」と安西(文部科学省2000)は述べている。これによって、安西は高校から大学への進学が、脱知識偏重の接続ができるとしている。

—第2章—

- (3) 九州大学では、九大OCの取り組み以外に、九州大学高大連携専門員会が主導となって実施している事業がある。それは、平成13年度から夏期休業中に門司高校と香住丘高校、修猷館高校を対象とした「オープンキャンパス等の公開講座」である。平成14年度の参加人数は、門司高校が5名、香住丘高校が80名、修猷館高校が30名であった(文部科学省2003)。本稿の事例(九大OC)は、教育学部が主導となって取り組んでいる事業であり、上記の事業とは関連性のない取り組みである。
- (4) 平成16年度後期は、事務局を大学(教育学部門地域連携ワーキング・グループ)のみにした。高等学校の担当者との連絡・参加高校生の調整は、インターネットサイト“TeamGear”を利用した。
- (5) 平成13年度前期・後期の高大連携事業は、「プレ」高大連携として位置づけていた。したがって、参加を呼びかけた高等学校は、県立高等学校4校(参加数140名)、実施期間は5月24日から7月10日の短期間であった。開講授業は、教育学部、文学部、工学部の12名の教員が、講義・演習の13科目である。

—第3章—

- (6) 残りの2つの高等学校は、調査項目が九大OCの参加後の感想に加えて、高校生の進路設計に関する質問項目を含んでいること、調査協力する時間的余裕がないことから、調査協力が得られなかった。
- (7) 本稿で示す夏期休業中の「オープンキャンパス」は、九大OCの「いつでもオープンキャンパス」と目的や形態の違いがあるために区別して捉えている。前者は、大学側が、高校生に大学・短期大学・専修学校の雰囲気を一日体験させるという目的をもち、高校生に合わせた催し物を開催しているという特徴をもっている。さらに、高校生側にも、卒業後に希望する進学先の雰囲気を体験したいという目的がある。けれども、後者の九大OCには、高校生の進路形成におけるガイダンス機能を果たすという目的があり、平日の大学生を対象とした授業・講義に聴講生として高校生を参加させるという特徴がある。九大OCは、前者の「オープンキャンパス」のように高校生の獲得を目的とした事業とは異なる。

—第4章—

- (8) 質問は卒業後の進路が進学希望者のみを対象とした。回答項目は、「学校の伝統や名声」、「学

校の雰囲気」、「学部・学科・分野」、「学費・生活費」、「卒業生の就職状況」、「学校施設、設備の状況」、「キャンパスの周りの環境」、「自分の学力・適性」、「地元での進学可能性」、「先生や周囲の人の薦め」の計10項目として、「とても重視する」から「まったく重視しない」の4段階で、進学希望先の情報の重視度を質問した。

- (9) 「学部・学科・分野」と「学校の雰囲気」は、九大OC参加者を対象とした質問項目「九大OCに参加した理由」においても、回答率の高い項目であった。参加理由の分析結果は、「志望する学部だったから」(47.9%)、「大学の雰囲気を知りたかった」(27.9%)、「九大の授業を受けたかった」(24.3%)である。
- (10) 質問は「あなたは進学希望先について、次の項目をどれくらい知っていますか」である。回答項目は、「あなたは進学希望先について、次の項目をどれくらい重視しますか」と同様に10項目設定して、「よく知っている」から「まったく知らない」の4段階で質問した。

<参考文献>

- 荒井克弘 2003「入試政策から学力政策への転換(第4章)」『高校と大学の接続：選抜接続から教育接続へ』東北大学大学院・教育学研究科、62-87頁。
- 池田輝政 2003「高等教育への教育接続の新しい構造(第1章)」, 荒井克弘編『高校と大学の接続：選抜接続から教育接続へ』東北大学大学院・教育学研究科、17-20頁。
- 勝野瀬彦 2003「高大連携～高校教育から見た課題と展望～」学事出版『月刊高校教育』4月号～12月号。
- 文部科学省 1991『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について』(答申)。
- 文部科学省 2000「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(座談会)」『文部時報』(No.1483)、12-23頁。
- 文部科学省 2003『高等学校教育の改革に関する推進状況』(答申)。
- 吉本圭一 1997「高校と大学の接続関係構築への方向と方策－実社会への接続を展望した、関係者の連携による多様な接続理念の確立」広島大学大学教育研究センター編『大学教育と高校教育－その連続と断絶－』広島大学大学教育研究センター、69-74頁。

本稿は平成15年度後期、教育学部門地域連携ワーキング・グループが実施した取り組みをまとめたものである。高校生の質問紙調査、報告書作成には、当時助手の福嶋智(現・神奈川大学)氏、学部生の飯田麻衣氏にお世話になった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

Educational Effect of Career Education: Educational articulation between High School Education and University Education

Hiroshi YAMADA

This paper discusses current and forthcoming career education in the light of educational considerations, such as the current university and high school cooperation project, as well as the educational effect of university education for career service.

This study builds on the questionnaire (“High School Students Career survey”) by “Kyushu University Open Campus” (Quniv-OC). First, I briefly describe the transition from high school to university (or junior college, occupational society). Second, I examine the conflict over educational system (especially educational articulate) that arose within the university purpose and high school student desire. Third, I demonstrate how educational effect in “Kyushu University Open Campus” can be extended to attempt for next year by using questionnaire. Finally, I conclude the paper.

After 1999, career education has been receiving increasing attention in both high school and university education in Japan. But, prior attempts to implementation for career education in Japan have been inconclusive because the cooperation between university and high school attempted lacked view of high school student desire to the cooperate project. This study includes almost the entire information set (audience, grade, term, educational contexts, etc.) of student desire.

Throughout the course of this essay I have attempted to demonstrate how “Kyushu University Open Campus” over educational and organizational orientations evaluated by students through questionnaire. The major findings can be summarized as follows:

First of all, from the point view of career education, “Kyushu University Open Campus” is evaluated to be satisfied by most high school students.

Second, in “Kyushu University Open Campus” for career education, high school students were not to attend academic level lecture but initiation level lecture.

Finally, questionnaire analysis of the relationship between university of one's choice and guidance system of one's choice indicates that guidance system of one's choice has a stronger educational effect for attended “Kyushu University Open Campus” students than absent students.